

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT
2013.5. VOL.21

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

研究科長就任ご挨拶

浅井 清文



浅井 清文 研究科長

本年度より医学研究科長・医学部長を拝命致しました浅井清文(分子神経生物学分野)です。よろしく願い申し上げます。

医学部では、この3月には、74名の卒業生を送り出しましたが、その全員が医師国家試験に合格という朗報が参りました。また、4月には95名の新入生を迎え、キャンパスは活気に満ちております。医学研究科におきましても、中西真教授(研究担当)、明智龍男教授(教育・学生担当)に副研究科長をお願いし、心新たに課題に取り組んで参ります。

今年は、医学部のルーツであります名古屋市立女子高等医学専門学校が1943年に設置されてから70周年になります。そのような記念すべき年に、前研究科長の藤井義敬教授をはじめ関係の皆様のご尽力により、新たに内科学とリハビリテーション学に関する2つの分野を開設できる運びとなりました。これら新分野が、円滑に発足出来るよう鋭意準備を進めて参る所存です。

さて、これまで大学の国際化といえますと、英語による講義を導入し学生の英語力を高めたり、海外の大学と学生や研究者の交流を深め海外の考え方を導入したりすることにあつたと思いますが、この度、医学部においては、国際基準に基づいた医学教育を行うことが求められることになりました。近々、正式な認証基準が示されるとのことですが、これには、臨床実習の充実化をはじめ、多くのカリキュラムの変更が必要となります。一方で、研究のさらなる活性化も重要な課題です。研究に携わる大学院生を多く確保するためにも、新たに始まる専門医制度に対応した大学院のあり方も検討していく必要があります。

このように課題山積ではありますが、教育・研究・臨床を通じて人を育てるといふ、大学に求められている最も重要な使命を忘れず、5年10年先をきちっと見つめ、たゆまぬ改革を進めて参りたいと思います。関係の皆様には、引き続き医学研究科へのご指導とご支援を賜りますよう、宜しく願い申し上げます。

【医学振興】寄附金ご協力のお願い

本学は、平成18年4月、公立大学法人として新たな一歩を踏み出し、教育・研究活動をより一層活性化させるための財政基盤の確立を目的として、同年8月「公立大学法人名古屋市立大学振興基金」を設立いたしました。本学に課せられた使命を着実に果たしていくためには、優れた教育・研究・診療環境の整備、充実が必須であり、広く皆様からの財政的ご支援をお願いしてまいりたいと存じます。なお、これまでに寄せられたご寄附は、既に研究棟の改修や身障者用トイレの設置等、環境整備のために有効に利用させて頂いております。

皆様におかれましては、この基金の趣旨をご理解いただき、「市立大学振興基金(医学振興)」に、ご賛同賜りますようお願い申し上げます。

※寄附金については税制上の優遇措置が設けられております。詳しくは、下記担当までお問い合わせください。

問 合 せ 先

ご賛同いただける方にはご案内をお送りします。

名古屋市立大学 医学部事務室 市立大学振興基金【医学振興】担当 TEL:052-853-8077(土・日・祝日を除く9:00~17:00) FAX:052-843-0863

“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

連携病院

足助病院

JA愛知厚生連足助病院は、豊田市における東北部(平成17年に東加茂郡足助町は豊田市へ合併)に位置する中山間地域のへき地医療拠点病院であり、都市部と田舎の格差が問題となっている日本の縮図ともいえる医療圏に位置する病院です。少子高齢化の先進地区における保健・医療・高齢者福祉事業を担っています。一般病床140床、療養病床50床有し、「保健・医療・福祉活動を通じて地域住民の生活を守り、自然と共生できる文化的地域作りに貢献する」ことを理念に掲げ、開かれた病院を目指しています。今年6月に全面改築が完成、地域のコミュニティの場所を提供することが可能となり、病院とは思えない施設になります。重要伝統的建造物群保存地区に選定された足助にふさわしい外観です。観光と共に是非お立ち寄り下さい。

院長 早川 富博



病院 北西側からの外観(まだ外構工事前)



暖かい雰囲気の玄関ホール



総合受付

豊川市民病院

5月1日待望の新病院が開院いたしました。新病院は名鉄八幡駅に隣接し、免震構造で9階建です。病床数は101床増え、一般病床440、精神病床106、結核病床8の554床となりました。設備面では、CT、血管撮影装置、手術室の増設、3テスラのMRIの導入、無菌室、バースセンター等新たな医療設備を備え、急性期医療だけでなく専門的かつ高度な医療に対応できるようになりました。又、ICU、HCU、救急病床20床を備え、新たに救急センターを新設し、1年後の救命救急センターの認可を目指しております。精神科病床が106床あ

るのも当院の特徴であり、精神科患者の身体合併症が多いことから、身体合併症病棟24床を新設し1年後の運用を目指しております。当院は研修医教育にも力を入れており、県下公立病院では初めて評価機構から4年の認定を受けております。このように当院は、診療機能の充実による安全で質の高い医療の提供、救急医療の充実、災害拠点病院としての機能を有し、東三河の中核病院としての役割を果たしております。

院長 吉野内 猛夫



病院外観



2F外来フロアー

教育

本年度から基礎自主研修が充実!

名市大での基礎自主研修は約15年前から導入され、基礎医学が修了するM3の11月から4ヶ月の間、医学に関する基礎研究テーマの実験に取り組み、科学的思考の修得を目指しています。“科学者”としての臨床医を育成する上でも非常に重要と考えられ、現在ほぼすべての医学部で実施されています。

本年度からは、本学部と関係のある国内外の先端研究実施機関においても研修することが可能となりました。良医の育成を目指す名市大。これまで以上に充実した基礎自主研修により、学生が益々大きく育つことを願っています。

H25年度担当:脳神経生理学 教授 飛田秀樹

研究者紹介



Megumi Uchida

内田 恵(うちだ めぐみ) 精神・認知・行動医学(助教)

専門:精神腫瘍学、コンサルテーション・リエゾン精神医学

近年、がんの患者に対して、身体的側面のみならず心理・社会的側面も含めた包括的なケアを提供する必要性が認識されるようになってきました。がんの患者における心理的負担は大きく、うつ病等の罹患率が上がり、QOL低下との関連が指摘され、またその家族も大きな心理的負担を経験します。このような心理的負担を軽減するような介入をするための基礎知見として、がん患者のニーズを評価しています。ニーズとは症状評価ではなく、患者が求める援助とその程度を評価するものです。個別のニーズを評価することにより、必要とされる資源を直接把握することができ、これをもとに個々の患者のニーズに即した介入の開発を目指しています。今後がん患者やその家族のQOLの向上に役立つような研究を行ってゆきたいと思えます。

近年の論文:Jpn J Clin Oncol 43:369-76(2013), Jpn J Clin Oncol 42:1175-80(2012), Jpn J Clin Oncol 42:704-10(2012), Jpn J Clin Oncol 42:530-6(2011)



Ayako Hattori

服部 文子(はっとり あやこ) 新生児・小児医学分野(助教)

専門:小児神経筋疾患

小児神経筋疾患における心拍変動解析の研究を行っております。筋ジストロフィーは進行性に筋量が減っていき、呼吸筋と心筋も侵される病気です。従来治療法がないとされていましたが、様々な治療法の可能性が出てきています。特にデュシェンヌ型筋ジストロフィーでは、遺伝子治療を含む様々な治療が始まっています。こうした治療には治療指標が必要ですが、現状は設備と人材の整った施設でしか評価ができません。非侵襲的かつどの施設でも検査ができる心電図を用いて心拍変動解析を行うことにより、心筋梗塞などで自律神経機能の評価や予後予測ができるようになってきました。この手法をもちいて小児神経筋疾患における特性を明らかにし、治療指標を作成することを目指しています。

近年の論文:Neuromuscul Disord. 22:149-51(2012), Ann Neurol (2012), Neuromuscul Disord, 21:489-93(2011), Brain Dev, 32:776-82(2010)



Keiko Kouno

河野 恵子(こうの けいこ) 細胞生化学教室(講師)

専門:細胞生物学

この地球上に最初の細胞が誕生した時、そこには遺伝情報をコードする核酸とそれを包みこむ細胞膜があったはずですが、外界との境界となって遺伝情報を保護する細胞膜が傷を受けると、細胞質分裂期の分裂リングに類似した構造体が傷の周囲に形成され、リングの収縮によって膜修復が速やかに行われます。この「細胞創傷治癒機構」は単細胞生物からヒトまで進化的に保存されており、欠損があると筋ジストロフィー症を始め様々な疾病が引き起こされます。私は真核生物のシンプルなモデルである出芽酵母をツールとして用い、その強力な遺伝学を背景に、細胞創傷治癒機構を研究して来ました。現在は得られた知見を高等真核生物に拡張すべく努力を続けています。

近年の論文:Cell. 150(1): 151-64 (2013), Mol. Biol. Cell. 23(20):4041-53 (2013), Mol. Biol. Cell. 19(4):1763-71 (2008), Science. 313(5783):108-11 (2006)



ANN FLORENCE B. VICTORIANO
アン フローレンス ヴィクトリアーノ

ANN FLORENCE B. VICTORIANO(アン フローレンス ヴィクトリアーノ) 細胞分子生物学(助教)

Specialization:HIV latency, transcription, epigenetics and chromatin, antiretrovirals, NF-κB signaling

HIV eradication may be achieved by understanding the mechanisms governing latency. My work focuses on the analysis of potential contributions of the chromatin modifier UHRF1 in the maintenance of the transcriptional silencing of HIV. Other research includes analysis of compounds targeting specific chromatin-associated transcription factors regarding gene activation and evaluation of specific microRNAs against HIV.

Publications:Clinical and Vaccine Immunology 2013. (in press), AIDS Res Hum Retrovir. 28: 125-38. 2011, J Mol. Biol. 410: 887-95. 2011, J Virol. 81: 1528-33. 2007, Antimicrob. Agents Chemother. 50: 547-55. 2006

名誉教授のご紹介

木村 玄次郎 名誉教授

木村名誉教授は和歌山県田辺市に生まれ、1973年に大阪大学医学部を御卒業後、NIH、ミネソタ大学、ハーバード大学への留学、国立循環器病センターを経て、1999年、二代目の教授として、旧第三内科に着任されました。その後、内科の再編成に伴い、全国でも珍しい循環器と腎臓を統括する“心臓・腎高血圧内科学”を創設されました。

研究面では、腎臓病に共通する進展因子である糸球体高血圧に早くから着目し、圧-利尿曲線を用いた独自の理論を確立されました。また、24時間血圧測定に基づいた夜間高血圧の重要性や高血圧性疾患発症の地域差に関連する様々な要因分析などを駆使し、多くの大学院生を育てられました。

昨年は名古屋では初めてとなる日本高血圧学会総会“高血圧治療は究極の目標へ”を開催されました。過去最大の賑わいを見せ、海外からの出席者をも魅了しました。また、腎疾患や高血圧の重要性を伝えるため、市民公開講座を年2回ずつ継続的に主催され、社会貢献されてきました。日本腎臓財団 学術賞、日本高血圧学会 学会賞を受賞されています。

昨年10月からは旭労災病院院長として、新病院開設に向け、日々、御尽力されています。

文責:人工透析部(医療福祉地域連携室/臨床工学室)
病院教授 吉田 篤博



木村 玄次郎 名誉教授

岡田 則子 名誉教授

1970年に共立薬科大学(現慶応大学薬学部)をご卒業された後、三共中央研究所、北里研究所細菌部で免疫学のキャリアをスタートされました。補体レセプターの発見など、特に補体に関する研究で次々に成果を上げられ、1983年に福岡大学医学部助手へ就任されました。助教授へと昇進される間、種特異的補体制御膜因子の発見等めざましい成果を上げられ、NatureやNEJMに掲載される等、補体分野では世界的な研究者の仲間入りをされました。

1994年に名古屋市立大学医学部附属分子医学研究所の助手として着任され、助教授を経た後、2007年5月に免疫学分野の初代教授に就任されました。名市大では、継続されていた種特異的補体制御膜因子の研究のみならず、HIV感染症に対する免疫学的治療法に関する研究や、タンパク質の分子認識理論の研究も行われており、相補性ペプチド断片で蛋白質の機能を阻害できることを証明されました。一方、大学院生、留学生などの研究指導だけではなく、生活や将来の不安などにも一緒に考えてくださる部下思いの先生でした。

今後も、創生されたC5aアナフィラトキシン阻害ペプチドの人への有効性をトランスレーショナルリサーチで立証するために精力的に研究が続けられます。

文責:免疫学分野 講師 今井 優樹



岡田 則子 名誉教授

02 時の人 People in the news

横井 基夫 名誉教授

横井基夫先生は、昭和47年に愛知学院大学歯学部をご卒業になられ、名古屋市立大学病院歯科口腔外科に入局されました。その後、昭和52年より愛知県がんセンター第一外科(頭頸部外科)で研修を行い、昭和55年に名古屋市立大学病院歯科口腔外科副部長、平成5年に部長となりました。平成19年2月には、それまで診療科であった歯科口腔外科が生体機能・構造医学専攻 感覚器・形成医学講座 口腔外科学分野として新たにスタートし、その初代教授としてご就任されました。

教授就任後は、医学教育の中での歯学教育に情熱を傾けられ、学生教育・後進の育成に御尽力されてきました。講座となり6年が経過して医学部での歯学教育が定着しつつある事は、横井先生の情熱あふれる学生教育による功績と思います。また、臨床面では口腔領域の不定愁訴(舌痛症)外来を行い、多施設で見放された患者を診療されてきました。横井先生のお人柄もあると思いますが、県内外から多くの患者が受診され、漢方を中心とした治療を行い良い成績をあげてきました。

今後も後進の指導にあたって頂けるものと思います。

文責:口腔外科学 講師 重富 俊雄



横井 基夫 名誉教授

OBのご紹介

埼玉医科大学 総合医療センター 総合周産期母子医療センター 新生児部門 教授 加藤 稲子先生

2012年2月より埼玉医科大学総合医療センターに勤務しています。埼玉医科大学総合医療センターは周産期センターにおける医療および教育の充実と拡張を実現化してきた国内有数の施設です。総合周産期母子医療センターとして母体胎児部門、新生児部門、産科麻酔部門の3部門を持ち、本年1月に新病棟が完成してNICU(新生児集中治療室)45床、MFICU(母体胎児集中治療室)24床がオープンしました。来年度にはNICU60床、MFICU30床が稼働する予定です。NICU、MFICUの窓からは世界遺産に登録されることとなった富士山を望むことができます。富士山が見えるNICUで、名古屋市立大学ご出身の故小川雄之亮初代小児科教授以来の赤ちゃんに対するDevelopmental Careとご家族に対するFamily Centered Careによる「赤ちゃん和家人に優しい新生児医療」を目指しています。

今年度は研究面の充実も目指しており、新生児の呼吸器系疾患、中枢神経系疾患および新生児蘇生法に関する研究を中心に展開していく予定です。

胎児期からNICUへの入院・退院後のフォローアップを含め、基礎的研究と臨床実績に基づいた医療を提供していければと思います。



新しくオープンしたNICUにて、一番右が加藤稲子教授



総合周産期母子医療センター:
2013年1月に完成しました



NICU Entrance: 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科
鈴木賢一教授にデザインしていただきました

感染対策チーム／感染制御室のあゆみと活動

■感染対策活動のあゆみ

名古屋市立大学病院の感染対策活動の歴史は古く、1981年の肝炎予防対策委員会の設置に遡ります。その後、時代の流れの中で1986年にAIDS対策委員会が発足し、翌1987年には両者を合体したウイルス感染症対策委員会となりました。一方、社会問題となったMRSAに対し1990年にMRSA対策委員会と称する院内感染対策委員会が設置され、1993年以降は両委員会が感染対策委員会のウイルス部会、細菌部会として併走しながらそれぞれウイルス感染対策、細菌感染対策を進め、活動してきました。そして2004年には両者を名実共に一本化し病院長を委員長とした現行の感染対策委員会に再編されました。同時に感染対策の実働部隊として結成されたのが感染対策チーム(Infection Control Team:ICT)です。

ICTのメンバー構成は内科、外科、小児科、救急など診療科医師と、看護師、薬剤師、検査技師、事務職員からなり、医学部・看護学部教員の方々にもアドバイザーとして協力頂いています。2009年からは院内感染対策を制御する中央部門として感染制御室が独立部門化され、感染管理組織はさらなる進化を遂げました。現在ICTの中核として医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師と多職種の構成メンバーが、それぞれの職種の専門性を活かしながら院内感染防止に努めています。



(後列左から) 脇山技師、塩田薬剤師、田上看護師、浦口事務職員
(前列左から) 野尻副室長、中村室長、長崎副室長

■感染対策活動について

感染対策は、患者さんならびに職員の安全を確保することを基本軸として、問題発生の防止や解決に向けての総合的、組織横断的な対応が求められる重要な任務です。院内感染が発生した場合の迅速な対応のみならず、院内感染拡大の兆候をいち早く察知するための監視、感染症診療や感染予防対策、耐性菌対策などの指導、院内感染防止のための職員教育など、継続的な活動が重要です。

職員全員が感染対策を実施し、患者さんに安全でより良い医療を受けていただけるよう、感染制御室は院内・院外の関連部署と連携しながら活動しています。



ICTによる感染症診療支援ラウンドの様子

■主な活動内容

①サーベイランス

臨床材料からの分離菌や薬剤感受性情報、抗菌薬使用実態などの病院疫学情報を収集、検討し現場へフィードバックしています。また感染症発生の確認や感染経路の把握、院内環境の汚染状況や保菌者の把握も行っています。

②コンサルテーション

診療科・部門における感染症の診療支援、抗菌薬使用に関する相談や感染対策に関する相談などに対応しています。

③感染拡大防止対策、予防策、職員衛生管理

アウトブレイク対策や院内感染発生防止対策、針刺し・切創による血液・粘膜曝露対策、ワクチン接種スケジュールなどを立案、実施しています。

④感染対策委員会、感染対策チームの運営

定例(各月1回)の開催を運営し、感染症発生時の臨時召集なども随時行なっています。

⑤院内ラウンド(巡視)

定期的な院内環境ラウンドのほかに、感染症診療支援のためのラウンド、耐性菌情報や抗菌薬使用状況にもとづくラウンドを適宜行なっています。

⑥感染管理マニュアルの作成・改定・整備

医療情勢の変化に速やかに対応し、逐次改定を行なっています。

⑦教育・啓発活動

定例の院内感染対策講演会／講習会や職種別講習会の開催、院外における講演会／講習会での講演や指導を行なっています。また地域医療教育学講座のご協力のもとに、感染症診療・感染管理のボトムアップを目指し、隔月で愛知県下8病院を中継したウェブ・カンファランスを開催しています。さらに、本学の学びなおし講座やウェルフェアなどの企画にも多職種で参画し、多施設共同研究への参加や学術集会での報告なども行なっています。

⑧院外ネットワークの構築

他施設・地域医療・行政との連携や協力、院外からの相談への対応を行なうとともに、愛知県や名古屋市などの行政会議のメンバーとして協議に参加しています。診療報酬の改定により昨年度から新設された感染対策連携加算では加算2算定施設5施設と年6回の協議を行なうとともに、加算1算定施設5施設の間で情報を共有し、地域の感染管理のレベルアップに努めています。

文責:名古屋市立大学病院 感染対策チーム長／感染制御室長 中村 敦

地域貢献・国際交流・地域活動

医療系3学部学生とともに 陸前高田で調査・ボランティア活動を行いました。

名古屋市立大学特別研究の一環として、平成25年3月17日より23日までの間、医・薬・看護学部学生12名・整形外科の村上里奈先生とともに岩手県陸前高田市で調査を行い、また仮設住宅や大船渡高校を訪問するなど、現地でさまざまな活動を行いました。1週間という短い期間ながら大変充実した時間を過ごし、学生共々多くのことを得てきました。報告会を開催して学内の方々との情報を共有し、名古屋を中心とする私たちの地域の防災・減災のあり方を検討しています。



岩手県立高田病院にて



修復中の「奇跡の一本松」の前に



医学部生による高田病院内での
処方薬認識度調査の様子

現地の復興は緒に就いたばかりでしたが、「頂いた支援にいつか恩返しをしたい」という言葉をあちこちで聞き、いつまでも被災者ではられない、という前向きな姿勢が印象的でした。「支援」から「交流し、絆を深める」ステージになっていることを強く実感します。今後も絆を絶やさずより強く結べるよう、継続的に活動していく所存です。

文責：医学・医療教育学 助教 飯塚 成志

東日本大震災の被災地への派遣報告

東日本大震災発生後、避難所における医療救護活動のため、平成23年3月21日～4月15日までの間、宮城県仙台市宮城野区へ5班の医療救護班を結成し、医師5名、看護師10名、薬剤師5名、事務職員7名を派遣したことを皮切りに、6月には、麻酔科医が継続的に不足している状況にあった福島県立医科大学附属病院へ麻酔科医を派遣、7月下旬には、職員の健康状態が懸念される陸前高田市にて、名古屋市病院局と共同で陸前高田市職員の健康診断や派遣している名古屋市職員の健康チェックに向かいました。

また、被災地への支援だけでなく、8月～12月において名古屋市による「陸前高田市の中学生を招待する事業」に「ホスピタル・プレイ・スペシャリスト」の資格をもつ看護師を同行させ、また、招かれた中学生は当院で「医師・看護師・薬剤師」の就労体験をするなどしました。

その後も引き続き多くの職員を派遣し続け、平成24年9月6日～12月7日の間、岩手県立高田病院へ看護師7名を派遣しました。被災地医療機関への支援と、今後想定される大規模災害発生時に備えて被災地医療を学び、平成25年2月にその派遣報告会を行い、現地での体験や成果の共有を図りました。

以上のような被災地支援の経験・経緯から、今後も要請に応じて公的医療機関として、さらには高度医療機関として、被災地支援を継続するとともに、改めて震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

文責：病院管理部事務課



陸前高田市職員さんの健康診断の様子



平成25年2月1日「派遣看護師報告会」の様子



厚生労働大臣「感謝状」

名古屋市立大学 オープンカレッジ、医療・保健学びなおし講座が「知の市場」奨励賞を受賞しました!

名古屋市立大学医学研究科では、一般市民を対象に健康科学に関する基礎的な講座を開講する「健康科学講座オープンカレッジ」と、医療・保健分野の専門人材の学びなおしを支援する高度な講座を開講する「医療・保健学びなおし講座」の2つを、社会人向け講座として継続開講しております。

このたび、連携している「知の市場」※の第4回年次大会におきまして「これまでの開講実績及び、今後とも人材育成と教養教育の発展及び知の市場の発展に資することが期待される」として、奨励賞を受賞いたしました。



知の市場協議会議長 増田 優 先生
(お茶の水女子大学教授)より、
戸莉 創 理事長に奨励賞が授与された。

第9回知の市場協議会・第6回知の市場評価委員会

日 時 / 2013年6月6日(木) 13:30~19:00

場 所 / 名古屋市立大学 桜山キャンパス 厚生会館(東棟)2階会議室

「知の市場」の概略

学生・院生を含む広範な分野の多様な社会人に広く開放し、強い学習動機と積極的な参加意思を有する者が、自己責任により自由に受講科目を選択して受講する学びの場です。

総合的で実践的な学習機会を提供するために、社会の広範な領域で活動を展開する多くの大学、学会、専門機関、企業、報道機関、市民団体などの幅広い協力と参画により、実社会で実践してきた多彩な講師によって講座を開講しています。

<理念>「互学互教」の精神のもと「現場基点」を念頭に「社学連携」を旗印として実社会に根ざした「知の世界」の構築を目指して、人々が自己研鑽と自己実現のために自立的に行き交い自立的に集う場とする。

(<http://www.chinoichiba.org/>)



市民向け講座のご案内

平成25年度 健康科学講座オープンカレッジ

本講座では、主に健康について、本学の各専門分野が蓄積している最新の重要な教育研究情報を、わかりやすく解説します。

【開催日時】 第2期 平成25年9月~10月各金曜日 午後6時30分~8時 全8回
第3期 平成25年11月~平成26年1月各金曜日 午後6時30分~8時 全8回

【開催場所】 桜山キャンパス 医学研究科・医学研究棟11階 講義室A

【募集対象】 一般

【定員】 各期80名(抽選)

【受講料】 各期8,000円

【応募方法】 往復はがきまたはeメール

第2期 平成25年7月29日(月)~平成25年8月16日(金)(締切予定)

第3期 平成25年9月30日(月)~平成25年10月18日(金)(締切予定)

詳細はホームページにて各期約1か月前に掲載予定

(URL:<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/>)

【問い合わせ先】 名古屋市立大学医学部事務室 オープンカレッジ担当

〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1

TEL:052-853-8077 eメール:igakubuoc@sec.nagoya-cu.ac.jp

平成25年度 名市大 医療・保健学びなおし講座

この4月より開講6年目をむかえ、春期講座が開講しました。

今年度も受講生のご意見、講師陣のアイデアにより、下記カリキュラムで講座を企画。既に始まっている春期は、121名の受講生が熱心に受講されています。

春期講座	火	必ず役立つ臨床栄養学-基礎から応用まで-
	水	脳の健康を考える-認知症・うつ病のいま-
	木	リハビリテーション医療の現状と関連分野における進歩
秋期講座	火	感染症のABCからZまで
	水	発達障害を学ぶ:医学的理解から教育/療育へ
	木	Birth Tour 2013-安全なお産を目指して-

※秋期9月~12月は、8/26(月)締切で受講者募集中です。

詳細はHPをご覧ください。

(<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/w3med/manabi/>)

問い合わせ先: 名市大 医療・保健学びなおし講座事務局

TEL:052-853-8078 eメール:manabi@med.nagoya-cu.ac.jp

ひとこと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!に無沙汰している同級生に、恩師に・・・ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

例えばこんな一言を、

- 研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は9月です)

- 1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 E-mail:igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp
名古屋市立大学医学部広報誌「一言メッセージ」係宛

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません

広報誌: 瑞医(ずい)

発行: 名古屋市立大学大学院医学研究科・医学部
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1
TEL(052)853-8077 FAX(052)842-0863

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp/>

※次号の発行は平成25年9月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]

☐☐
我こそは
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp または医学部事務局 広報担当まで